

英文読解における誤読要因の分析

小 玉 容 子、マユー あ き、松 浦 雄 二

(英文教室)

An Analysis of Some Factors Causing Students' Misreading

Yoko KODAMA, Aki MAHIEU, Yuji MATSUURA

キーワード：誤読要因、英文読解力、指導上の留意点

I. 目的

平成 16 年度は、英文専攻生の学力の多様化という背景のもと、英語基礎学力テストにおける誤答分析を行い、語彙、文法を中心とした基本的な英語力テストに見られるつまずきの原因を探った（松浦、マユー、小玉：2005）。本稿では、引き続き、学力の多様化の実態を把握するために、学生の読解力分析に取り組んだ。

英文を読む時、特に少し長い文章を読む時、重箱の隅をつつくような読み方から離れ、内容の大意把握ができれば良いという考え方がある。しかし、その大意把握の基礎である、語の理解、文の理解などが確実になされていなければ、正しい内容理解へとは向かえない。

また、近年のコミュニケーションは、人が顔をつきあわせて口頭で行うコミュニケーションばかりではなく、インターネット情報の読解等、書かれた文章を理解するという「読み」の占める割合が大きく

なっている。この「読み」に関して、昨年度明らかになった文法上の留意点と読解との関連も含め、学生がどのような読み方をしているかの現状を知り、学生の読解力を確実なものにしていく処方箋を見つけることが本稿の目的である。

II. 分析対象と方法

今回の分析対象は、本学英文専攻一年生前期開講の米文学演習で用いたジョン・スタインベックの短編「白ウズラ」の、学生による日本語訳である。^{注)} 学生は授業での発表のために、それぞれ語彙リストと日本語訳を提出した。分析対象とすることを事前に伝えず、学生たちが英文読解に取り組む普段の姿勢をみようとした。日本語訳については、とりあえず日本語にし、授業をとおして読みを深めていこうという姿勢で取り組んだと思われるものから、他の人たちに理解してもらうことを意識して取り組んだと思われるものまで様々であった。このような事情

を前提に、学生の日本語訳における問題点を語のレベルと文のレベルに大別し、誤訳を導いた要因を分析し、学生が正しく読むために何が必要かを考察していく。

Ⅲ. 分析と考察

分析対象としている日本語訳は個人の訳である。個々の学生の誤読があたかも学生全員の誤読であるかのような印象を与えることのないように注意したが、個人の抱える問題点が学生全般の抱える問題点の傾向を表す場合もある。従って、指摘している誤読の例は、学生の学力が多様である実態を示すと同時に典型的な誤読の例を示しているといえよう。

1. 語のレベル

英文が読めない時の理由の一つとして、しばしば、「語彙が少ない」ということが挙げられる。今回、学生たちは制限無く辞書を利用できるので、語彙の多寡そのものは問題外となる。では、語彙がどのような点で読解の鍵となっているのだろうか。

「単語さえわかれば英文を読める」という前提は真実とは言えないことを、宮浦は次の例で具体的に示している。

The pitcher threw to first base. The ball sailed into right field. (下線は筆者による。以下同じ。)

下線を引いた語は、二つ以上の意味を含む語であり、例えば pitcher は「水差し」、「(野球) 投手」、right は「右の」、「正しい」である。単語の意味を知っているかどうかのレベルで考えても、多義語や同音異義語の場合、まず、多義語や同音異義語であることの認識から始まり、どの語義が適切かの判断をしなければならない。即ち、読解とは、正しい語義の選択、それらの統合という、複雑、且つ知的な作業である。ましてや、本当に内容を理解しているかどうかを考えた時、この例文の場合:「そのピッチャーがファーストに投げた(のはボールであり)、そのボールがライトに飛んでいった」。「ファースト」といってもそれは「一塁手」であり、「ライト」といっても

方向ではなく「場所」を指すことなど、語の意味に関する知識も必要である。そして、「一塁手」に向かって投げられたボールを一塁手は取り損ね、外野のライト方向に飛んでいったのだから、守備側にはピンチであり、攻撃側にとってはチャンスであるというような、球場や選手そしてボールの動きが頭の中に浮かばなければ、真の理解とは言えない。

この例が示しているように、語義の選択一つをとっても、常にコンテキストをベースとして考えていく必要があり、語義が選択できても、その語義は世界知識を背景とした柔軟で且つ具体性を帯びたものでなければならないのである(2002: 37-38)。

学生の理解のレベルに関して教員側の認識が甘いと、理解しているか確認すべき事項でも、当然理解されていると思い、素通りしてしまう場合が起こりうる。学生の日本語訳を分析していく上で、間違いを指摘するだけではなく、何が誤解の原因かを探ることが重要になる。そして、理解(誤解)の多様性の中身を明らかにし、その多様性を受けて、教員側が指導の際どのような点をしっかり確認していくべきか、常に認識しておかなければならない。

以下、語のレベルで大きく5つの項目にまとめ、具体的な例を挙げながら分析していく。

1) 動詞の原形、名詞の単数形・複数形の解読

動詞の活用に関して、過去形や現在分詞形から原形を取り出し、適切な語義を選択できなかった例である。

(1) The cat bounded back into the brush. (P.24)

(2) ... with gradually sloping edges so the birds could drink easily. (P.16)

担当学生は(1)の例文を「その猫は縛りつけられ、雑木林に戻った」と訳している。「bounded」を辞書で調べる場合、先ず-edをとった形、原形の'bound'を調べるだろう。だが、辞書ではboundがbindの過去・過去分詞形であることが先にリストアップされているので、次のboundの項へと進まずbindの意味で理解した結果、上記の解釈になっていると考え

られる。back に時制のシグナルが無いことから、この語が文中で動詞として機能してはいない点に気づくことなく、先に出会った bind の意味で何とか自分なりに意味ある解釈を試みている。何が原形であるかをしっかり意識して辞書を引けばこのような誤読には至らなかっただろう。(2) の例では、sloping は slope + ing であることを解読していれば、slope を辞書で引くことができただろう。しかし、slop という語が学習辞書では大概 slope の直前にあり、担当学生は、この語に先に出会った結果「(液体を) こぼす」の意味で解釈を試みている。slop の現在分詞は slopping である点はチェックせず、「じわじわとこぼす」というようなところで解釈に行き詰まる結果となっている。ここでも、動詞の原形に対する意識の低さが誤読の原因の一つであるとする。(1) も (2) も、選んだ語義が文の中で意味をなさないことに気づいたら、その時もう一度辞書に戻る姿勢が学生には必要である。一語一語の意味ではなく、コンテキストの中で語の意味を考える習慣を身につけることが、意味ある英文解釈への第一歩でもある。

次も読みの基本でつまづいている例である。

(3) Hadn't she picked out the place where the house and the garden would be years ago? (p. 14)

(4) And then the quail ran out, with funny little steps. (p.23)

担当学生はそれぞれの下線部を (3) では「一年前」とし、(4) では「一步」としている。複数形であることに注意せず、単に一年、一步と理解してしまうと、(3) では、物語中の女性の行動一偏執狂的に庭にこだわっている女性が、自分の庭にぴったりの場所を年月をかけて選んだことが理解できないし、(4) では、描かれている状況一ウズラがちょこちょこした足取りで進む様子一をイメージすることが不可能である。音読を聞いていても気づくことだが、複数形の -s に注意をあまり払わない学生がいる。たとえ一文字であっても重要な意味を持つので、その一文字を意識させるためには、意味を考える時だけでなく、音読の時もこの -s に注意を向けさせることが有

効な方法の一つであろう。

2) A といえば訳語は B とする単純な日本語への置き換え

次の例文では、'you' といえば訳語は「あなた」という単純な理解が文章理解の正確さを失わせている。

(5) If you didn't go around to the front of the house you couldn't tell it was on the very edge of the town. (p.14)

担当学生は“you”を「あなた」と訳している。この場合の“you”は「(一般に)人々」を指しているのに、日本語の訳として表す必要のないことが多い。'you' だけではなく 'they' や 'we' も含めて、総称的な人称代名詞を、「あなたは」「彼らは」などと安易に日本語に置き換える傾向が学生にはあるが、実際に特定の人を指しているかどうかを文脈の中で考え、訳語の選択をしなければいけない。

既知語(句)の場合、その訳語が文意を適切に表しているか、また文法上の誤りはないかなどを考えず、単に日本語に置き換えている例は他にも見られた。例えば次の文中の“right”や“good”などである。

(6) Right at the edge of the garden, the hill started up ... (p.14)

(7) Mary Teller, Mrs. Harry E. Teller, that is, knew the window and the garden were Right and she had a very good reason for knowing. (p.14)

(6)、(7) の文で、担当学生は両者とも 'right' を「右(に、の)」と訳していた。(6) では“Right”のすぐ後に“at the edge of the garden”という場所を表す副詞句があり、これは“Right”が強意の副詞であることを示す句でもある。従って「庭の際の右側から(担当学生訳)」ではなく「庭の際、そのすぐそこから、山の傾斜が始まっていた」のである。場所を表す副詞(句)を修飾する強調の 'right' にはかなり頻繁に出会えると思われる。その都度、単に強調の right であることの指摘に止まらず、形容詞として「右の」と

いう意味で用いられる時は、通常、冠詞または one's を伴い、限定的に用いられる点にも注意を促すべきだろう。

(7) では、文中に Right と大文字で用いられているので、当然一層の注意を向けるべき語である。先にも述べたように、「右の」という意味では冠詞を伴い、限定的に用いられるので、「窓と庭は右であった (担当学生訳)」とは決してならない。ここでの Right は「申し分のない」状態であることを表している。大文字で表現されているのは、計画的に、計算して作った窓も庭も、計算どおりの位置にあり、彼女の思いを完璧に実現していたからである。Right のように、様々な意味で、かつ高い頻度で用いられる語は、それぞれの用例とともに、何を意味しているのかを考えて日本語を選ぶ必要がある。

同様に、good も常に「良い理由 (担当学生訳)」ではない。(7) の a very good reason のように reason と一緒に用いられる時は「正当な」の意味で用いられることが多いが、文脈を確認しながら適切な訳語の選択をすべきであることは鉄則である。知っていると思っている語でも、解釈に違和感を持った時は、もう一度考え直すというモニターを意識的に行う必要がある。

次は多義の接続詞の意味の捉え方における誤りの例である。

- (8) She stretched her pretty arms and fingers on the chair, as she had seen them through the window. (p.20)
- (9) Harry was ashamed, but really he couldn't help it if she had such an imagination. (p.22)

ここで取り上げた接続詞に関する意識は決して高いとは言えない。まず (8) の例文では、as を「それらを見ながら」と訳している。多義語の場合、どの意味を選択するかは意味のつながりを考慮しなければいけない。しかし、(8) の例文は時制に注意を払えば、かなり機械的に不適切な意味を排除できる。前半は過去形で、as 以下は過去完了形が用いられている。従って、二つの動作がほぼ同時に行われるこ

とを表す「(～し) ながら」という用法はこの場合適切ではない。As には他に原因・理由、譲歩、比較、様態など様々な用法がある。例文では「彼女が腕や指を伸ばした」が、「(既に) 窓からそれらを (腕や指を) 見ていたとおりに」伸ばした、と様態を表す意味が、この文以前の彼女の行動も知っている読者にとっては唯一の選択肢となる。

接続詞 if も as 同様に多様な意味で用いられる。担当学生は (9) を「もし彼女がそのような想像を持ったら」と訳している。しかしこの場合、論理的なつながりを考えれば、前半で「ハリーは恥じた」「しかし実際、彼にはどうしようもなかった」と言っているのだから、「たとえ彼女がそのような想像をしたとしても」という譲歩の意味が引き出される。最初は単純に「もし～なら」で置き換えたとしても、複数の意味や用法を持つ語は、文脈からまたは文法の知識を用いて意味を選択するしか方法はないので、選んだ訳語が適切に選択されているかをモニターしつつ、柔軟に、修正を加えながら読むことが大切である。

多義語の場合、意味の選択が画一的になりやすい例をみてきたが、次は疑問詞なのか、感嘆詞なのか、間投詞なのか、文中での how や why の意味へのアクセスが困難になっている例である。

- (10) "Making up parties," she thought, "coming to my garden in the evening. How they must love it! How I would like to come to my garden for the first time." (p.23)
- (11) "Why." Mary cried to herself, "she's like me!" (p.23)

(10) の最初の下線部を担当学生は「なんて素敵なんでしょう」と訳している。直前に、鳥たちが群れをなして庭にやってくる音を聞いた彼女の言葉なのだが、学生訳では彼女の嬉しい気持ちを表す文になってしまっている。原文は主語が they であり、「鳥たちはすごく庭を気に入っているにちがいないわ!」とメアリが確信し興奮している文である。メアリの興奮 (喜び) を表している点では、担当学生訳が 100% 誤訳であるとは言いきれないが、意識をしすぎ

である。また、感嘆文だからと how に「なんて～だろう」という訳語を単純に当てはめている点は、やはり注意を促すべきである。後半は “How would you like ...?” のように「(初めて庭にやってきて) どうですか」と鳥に対し印象を尋ねる文として訳している。ここでも主語 I に注意しなければならない。この場合、「初めての時、私はどんな風にこの庭にやってきたいだろうか」と考えているのである。そしてこの文に続いて、メアリは二人の自分を演じ、庭にやってきた自分を主人である自分が迎える場面を想像するのである。‘How’ が ‘would like’ と共に用いられているから、「～はどうですか」と安易に置き換えるのではなく、やはり文の主語、動詞をしっかり確認する基本を忘れないように指導しなければならない。

(11) で ‘why’ は間投詞として用いられているが、担当学生は、単純に、‘why’ といえば「何故」と解釈し、『『どうしてなの。』』と訳している。‘why’ だけでなく ‘boy’, ‘my’, 間投詞として用いられる ‘God’ なども含め、読解を通して、間投詞の用法に慣れさせる必要がある。

単純によく知っている語義に置き換えて良しとする傾向を修正するためには、繰り返しの注意が必要である。教員のある指摘がツボを得ていて、ピンとくる学生と、既にその指摘は理解できている学生がいるだろうが、ほんの一言の指摘が生きてくる場合があるので、学生の理解の幅を常に意識することが教員の側には大切である。

3) 品詞を正しく理解していないために起こる誤訳

(12) From the window, preferably if you were sitting on the window seat, you could look across the garden and up the hill. (p. 14)

担当学生は preferably を「もし窓際の椅子に座るのなら ... (それが) 望ましい」というように、形容詞のように訳し、“from the window” を日本語訳から落としてしまっている。副詞の “preferably” は文修飾で、この場合 “if you were sitting on the window seat” を修飾し、「なるべくなら、できることなら」

等のような意味で用いられる。例文では、“From the window”, 「窓から (庭や丘が見えるが)」を、さらに限定的に、「なるべくなら窓下に設けた椅子に座わり (窓から見るともっと良いのだが)」と追加的な説明をしている。このようなコンマで区切られた追加的な説明の挿入に、文全体の構造の中で気付くことがなかなか難しいようである。この例文の構造を理解する一つのポイントは、“preferably” という語の品詞、その用法に注意をして、‘preferable’ との違いを確認することであろう。

次の例も、品詞の理解ができていれば誤訳が防げたと思われる一文である。

(13) She looked closely at him and saw a rebellious light come into his eyes. (p. 25)

“She looked closely at him” を担当学生は「彼女は彼に近づき」と訳している。副詞の “closely” には、「接近して、ぴったりと、綿密に、じっと」などの訳語が辞書では挙げられている。江川は -ly の有無で意味と用法が微妙に異なる副詞の説明の中で、一般に -ly のない形は具体的 (主として空間的) な意味で、-ly のある形は抽象的 (主として精神的) な意味で使われると解説している (1998: 131)。学生訳の場合、辞書での訳語のみを見て、彼女は彼を「接近して」見た、と理解し、その延長線上で「彼女は彼に近づき」と解釈したのかもしれない。動詞や副詞などを修飾する語としての副詞の働きを常に念頭に置く必要がある。この場合、「彼女は彼を見た」時、どのように見たのかを抽象的に説明している語であるから、「彼女は彼をじっと見た」となる。基本的な主語、動詞という文構造の把握と共に、品詞の働き、用法などの文法事項を確認する必要がある。

4) 句動詞

次も副詞の働きに関して、一面的にしか理解していないために誤読をしている例である。

(14) She lay quivering on the bed ... She sat up ... “Lie back, dear” (pp. 24-25)

担当学生は “She sat up” を「彼女は立ち上がった」と訳している。例文の場合、彼女は「座った」のであり、立ってはいない。どの様に座ったか、その動きの方向を示しているのが ‘up’ であり、寝ていた状態から「上半身を起こした」のである。また、“She sat up” の前には「彼女は震えながらベッドで横になっていた」、そして後ろには『「もう一度横になりなさい」』という文があるので、文脈からも「体を起こした」状況の推測は可能であろう。このような誤解は、副詞の働きと基本的な意味をしっかりと理解させることで防ぐことができるだろうが、同時にコンテキストを考えながら読む読解の基本姿勢も繰り返し指摘すべきである。

(14) の up のように、句動詞 (動詞+副詞 / (+) 前置詞) でよく使われる語に関して、基本的な働きや意味を理解することは、句動詞の意味理解のためにも大切である。例えば、3) (12) の例文では、“look across the garden and up the hill” という表現を担当学生は「丘の上の方と庭を見る」と訳している。across と up は、「見る」という動作の対象である「庭」と「山」に対して、視線がどのように動いたかを表しているのだから、語順通りに、視線は先ず「庭を横切り」そして次に「山肌に沿って上方へと」動いていった点を理解する必要がある。副詞や前置詞を、常に動詞との関係の中で意味を捉え、解釈する姿勢が不足している学生がいることがわかる。

句動詞は動詞に付随する副詞や前置詞の意味・働きを理解することで句としての意味を捉えることができるものもあるが、動詞を含む二語以上の句で意味上の一単位を表す場合もある。どの意味単位で使われているかは、やはり文脈で判断するしかないだろう。

次は意味の単位を誤って判断し、誤訳となってしまう例である。

(15) And then the quail ran out, with funny little steps. (p.23)

担当学生は “ran out” を「尽きた」としている。ウズラ (の群れ) はこの場面で、藪から「走って出

てきた」のである。「尽きた」という意味では文脈に一貫性がないことに気づくであろう。英文、特に物語りを読む時は、イメージをつかみながら読むことが大切である。ここでもウズラの動きをイメージしていればこのような誤解は避けられたと思われる。同時に、意味の一貫性がない場合は誤読をしていることが多いという認識を学生が持たなければならない。

次の “put out” も副詞の意味をつかむ必要がある。

(16) “If there's a cat, I'll put out poisoned fish,” she cried. (p.18)

下線部を、担当学生は「毒入りの魚を食べさせる。」と訳しているが、“put out” は単に「〈家の〉外に置く」と言っているだけである。“Put out” を辞書で調べると、「...を出す」という意味で用いられることがわかる。担当学生は「魚を出す」という意味の延長で「食べさせる」としたのだろうか。家の外に毒入りの魚を出しておいて猫に食べさせようとした点は事実だが、ここでは put「置く」という行為のレベルで捉えるべきである。別のページでも、別の担当学生が同様の誤読をしている。

(17) “Harry, you must put out poison.” (p.25)

この例文を担当学生は「ハリー、あなたは毒をもらなければいけません。」と訳している。「毒をもら」とは「毒を食べさせる」ということなので、“put out” を (16) の担当学生と同じように解釈していると言える。内容を考え意識を試みたかもしれないが、動詞+副詞の意味を理解しているかの確認が必要な訳になっている。

次は “go around to” というような、副詞+前置詞を含む句動詞をどのように読んでいるかの例である。

(18) If you didn't go around to the front of the house you couldn't tell it was on the very edge of the town. (p.14)

担当学生は「もしあなたがその家の周辺に行かな

かったら」と訳している[‘you’に関しては2)(5)を参照]。“around to”は動詞“go”の動きの説明であり、“around (the house)”「ぐるっと回って」、「to (the front of the house)”「(家の前)まで」行くのである。このように、場所を表す副詞語句を並べる場合、初めに漠然と方向を示し、次に細かく言うのも英語の大きな特徴である(江川 1998: 138)。この用法の理解が学生にとっては比較的難しいことが、以下の例からも窺える。

- (19) Mary walked out into the garden and across the lawn to a folding chair half behind one of the lawn oaks. (p. 22)

担当学生は、前半を「メアリは庭から外へ歩き」としている。メアリが歩いた方向は先ず、“out (of the house)”「(家から)外へ」であり、次はその動きを細かく“into (the garden)”「(庭)の中へ」と説明しているので「メアリは家から庭へ出た」のである。また、文脈からも、(19)の例文の直前に彼女が家の中にいたことはわかる。家の中にいる彼女が突然庭から外へ出ることはない。そして“across the lawn to a folding chair”と続いているので、彼女の一連の動きは、庭の中での動きとして捉え、読み進めることができるのである。

語彙のレヴェルとして、最後に動詞と助動詞の意味に関する問題点に触れていく。

5) 動詞(助動詞)の意味、自他の区別

助動詞の意味や状態動詞と動作動詞の意味の区別が曖昧になっている例をみていく。

- (21) “Tomorrow morning I’ll give that cat something to remember.” (p.26)

担当学生は(21)を「明日の朝、私はその猫に何か思い出す物を与えるだろう。」と訳している。‘will’に関しては、単純に「～だろう」と日本語にしている例が他にも目立った。やはり意思を表すためには「(～する)つもりだ」と訳しないと、正しい解釈と

は言えない。

また、‘remember’は、状態動詞としての意味と動作動詞としての意味があるので、どちらの意味かを文脈から判断しなければならない。この場合は「思い出すもの」ではなく、「覚えているもの、決して忘れられないもの」を猫にやるつもりだ、(そうすれば今後も猫はこの庭にはやってこないだろうから)、と解釈しなければ正しい解釈にならない。このように、先にも述べたが、単純に語の意味を選び、置き換えただけでは真の読解とは言えないのである。

自動詞と他動詞の区別に関しては、平成16年の「英語基礎学力テストにおける誤答分析」(松浦・マユー・小玉: 2005)で、‘shock’と‘excite’を取り上げ、感情や心理状態を表す動詞の理解が不十分である点を指摘した。‘shock’も‘excite’も、「〈物事が〉〈人〉にショックを与える」、「〈物・事が〉〈人〉を興奮させる」のように人を目的語にとる他動詞である。日本語で「〈物事に〉〈人が〉ショックを受ける」「〈物・事に〉〈人が〉興奮する」のように人を主語とし、能動文で表す場合、これに対応する英語表現は、人を主語とする受動文となる。

次の例の‘discourage’も心理状態に関わる他動詞で、人を目的語にしたSVO形をとる。意味は「〈人・物・事が〉〈人〉を落胆させる、〈人〉の勇気[やる気、自身]を失わせる」であるが、先の例と同様に、日本語で「(人が)落胆した、(人が)やる気を失った」のように表わす時、英語では受動文になる。

- (22) And they discouraged the enemy on the other side ... (p. 23)

担当学生は「それら(フクシアの花)は... 敵にがっかりした。」という能動文で日本語にしている。例文は受身形ではないので、「(主語“they”が)がっかりした」とはならない。主語“they”は、目的語“the enemy”(この場合は、庭に侵入しようとしている荒れ果てた丘)を「がっかりさせた」のである。言い換えれば、「フクシアの花は敵の勇気(戦意)を失かせた」となり、「がっかりした」のは「the enemy」(敵)である。このように日本語と英語の表現方法にずれ

がある場合は特に意識して学ばせる必要がある。

次に文レベルでの問題点を分析していく。

2. 文レベル

学生の英文読解における問題点として、一文一文は訳せていても全体として結局何を言っているのかが理解できていない、ということがよく指摘される。個々の文の意味は理解しているのに、場面の把握、作者の意図、段落の主題などが答えられないケースである。しかし、今回学生の日本語訳を分析してみても、文章読解の前段階の問題として、文レベルの読解に手こずり躓いている学生がかなり存在することがわかった。文学テクストを読むことへの慣れが足りないことも躓きの一つの要因と言えるかもしれないが、テクストのジャンルに関わらず、文の構成を構築する文法力が不十分であることが誤読の大きな原因になっていることは否定できない。どこからどこまでが意味のまとまりを作る構成素（チャンク）なのか、各構成素がどのような文法特性を持っていてそれぞれがどのように結びつけられるのか、こうしたことを見極める力が学生によって程度の差こそあれ、全体としてまだまだ不足していることが明らかとなった。

以下、どのような文構造の把握ができていなかったのか、具体的事例に即して見ていく。

1) 分詞構文

分詞構文を含んだ文の場合、構造的に分詞構文であることをきちんと把握して意味を理解することは、学生にとって難しいようである。

- (1) Mary held the flashlight while Harry did the actual killing, crushing the slugs and snails into oozy, bubbling masses. (pp.17-18)

この英文では、下線部が分詞構文となっている。その前の主文 “Harry did the actual killing” で述べられる事態に付随する状況を説明しており、Harry 以下は「ハリーが実際の虫退治をした。ナメクジやカタツムリをつぶしてじくじくと汁の出る泡だつ塊にしながら。」という意味になる。しかし、担当の学生

の日本語訳は「ハリーは実際にナメクジやカタツムリを殺し、つぶし、だらだら流れて、泡だったかたまりにした。」となっていて、“killing” と “crushing” を単純に並列的に捉えて解釈してしまい、分詞構文を理解している訳とはなっていない。担当学生は、おそらく意味の区切りをシグナルしているコンマに注意を払わず、“killing” も “crushing” も動詞の ing 形であることから、両方とも “the actual” につながる動名詞と考えたのではないかと推察される。つまり、あたかも “Harry did the actual killing and crushing……” となっているかのようにこの部分を解釈したのである。ここでのコンマは、その前後の間にある意味の区切れを示していることをまず理解させてチャンキングを修正し、前の “He did the actual killing” と後の “crushing the slugs and snails into oozy, bubbling masses” の二つの意味のまとまりを把握させなければならない。それから、コンマの後の意味のまとまりにおいては、crushing が現在分詞で、主文 “Harry did the actual killing” と何らかの意味でつながっている分詞構文となっていることを構造的に確認させることが大切で、それが確認できれば、主文と分詞構文で述べられている内容から、後者の内容は前者の付帯状況になっていることへの理解へ到達できるであろう。

分詞構文は主に文章体での表現法であり、正しい文章読解のためにこそ十分習熟しておく必要がある。英語を読む授業の中でこそ意識的に取り上げて、学生の理解を着実なものにしていかなければならない。

次の例は、分詞の意味上の主語が文の主語と一致しない独立分詞構文の例である。

- (2) In front of the fuchsias lay a shallow garden pool, the coping flush with the lawn for a very good reason. (p.14)

下線部の独立分詞構文に対するある学生の日本語訳は、「水が芝生に流れ出るのをうまく対処している」という相当破綻したものになってしまっている。分詞構文になっていることが理解されていないことはもちろん、この部分がどのような構成要素に分割で

き、それぞれがどのように意味的に結びついていくのか見当がつかず立ち往生してしまっているように見える。

このような場合、学生が自分で正しい解釈にたどり着くためにどんな方略を取り得るだろうか。内容語に注目し、意味の通る命題を先に考えてからそれに適合するように統語構造を分析するという意味のストラテジー（天満：1989）は、おそらく最初の第一歩としては有効ではない。“coping”をより馴染みのある動詞 ‘cope’ の ing 形としてではなく、名詞の “coping” として取り出すこと自体が、そもそもかなり難しいことだからである。

ここでは、統語のストラテジー「冠詞 (a, an, the) や数詞 (some, all, many, two, six など) を見れば新たな名詞句のはじまりと考えると、その句の終わりを示す名詞を探す」(天満 1989 : 87) を働かせ、まず構成要素を適切に分割するのがよい。そうすると、名詞句として “the coping” と “the coping flush” の二つの可能性が考えられるが、どちらが適切な区切り方かを判断するためには、辞書でそれぞれの名詞句がどんな意味を持ち得るのか確認し、文脈との整合性を判断する作業が必要となる。“the coping flush” の場合、動詞 ‘cope’ の現在分詞が名詞 ‘flush’ を修飾していると解釈できるが、‘cope’ は「＜自＞うまく処理する、対抗する、＜他＞～に出会う」、‘flush’ は「紅潮、出水、水洗、興奮など」で、両者を結び付けても筋の通る意味は見出せない。そこで改めて名詞としての ‘coping’ を辞書で調べてみると、「塀などの一番上の冠石」であり、ここでは池を囲んでいるセメントの頂層部を指していることに気がつく。続いて ‘flush’ を辞書で見ると、形容詞としての ‘flush’ が ‘with’ を伴って「＜…と＞同一平面で、同じ高さで」という意味で用いられることがわかる。こうして下線部分が、意味的には「池のセメントの囲いの天辺が芝生と同じ高さである」こと、そして構造的には ‘flush’ の前に ‘being’ が省略された分詞構文であることが理解されるであろう。

取り上げた部分は、独立分詞構文であることに加え、ほとんど馴染みのない名詞 “coping” がこの部分の読解をかなり難しくしていると思われる。しかし、手持ちの意味・統語のストラテジーを駆使して構成

素としての名詞句 “coping” の取り出しに一旦到達できれば、そこからさらに辞書を丹念に調べることで、この部分の意味と構造を大体理解することは不可能なことではない。正しい読みへ到達するのが難しい英文ではあるが、何とか理解しようと取り組む姿勢を持つことが読解力を高める原動力になる。

以上、学生が苦戦している分詞構文の事例を見てきたが、同じく分詞構文を含んでいても、学生が問題なく意味を正確に取れる場合もある。例えば、別の授業で扱った新聞記事からの次の一文がそうである。

- (3) They are the most perfectly preserved mummies in the world, their skin so intact that they look practically alive, their clothes still bright and new, the remains of their last meal still undigested inside their stomachs, writes Uki Goni in Buenos Aires. (*The Guardian Weekly*, Sep. 30 – Oct. 6, '05)

学生にこの英文の意味を問うと、下線部の分詞構文についても特に問題なくきちんと答えられた。しかし、構造的に理解されているかどうか確認したところ、次に示すように being が省略された分詞構文となっていることへの認識を学生たちはほとんど持っていなかった。

- (3) ‘……, their skin (being) so intact that they look practically alive, their clothes (being) still bright and new, the remains of their last meal (being) still undigested inside their stomachs, ……」

統語構造が分かっていなくても、そのまま読み下して内容語をつなぎ合わせることで意味的につじつまの合う命題を構成することが容易な、ある意味、学生たちにとっては幸運な分詞構文のケースだったと言える。しかし、意味は正しく把握できてもそれが統語構造上の理解にもつながっていなければ、それはたまたまその時正しい解釈にたどり着いただけのことで、後の読みの活動には生かされてこない。読解中心の授業においても、意味が大体つかめてい

ればよいで済ますだけでなく、適宜学生の統語構造の理解にはチェックを入れ、意味と構造の対応関係を考える訓練を積み重ねていくことが大切である。

2) 同格

次の例のように、コンマで区切った後、前述のある部分を別の表現で言い直したり、より詳細な意味内容を伴うなどして再度述べ直す同格表現は、英文を読むと頻繁に見かけるスタイルである。しかし、学生はこのようなスタイルへの慣れが不足しており、言い換えによる再叙述として認識できず、意味を的確に掴むことに躓くことが多い。

(4) Mary waited until it was all done, all finished exactly as her mind had seen it ... (p.16)

担当者はこの文の構造がつかめず、コンマまでを「メアリーはそれが全て終わるまで待ち」と訳し、後半は“mind”で区切り、「全てが彼女が思っていたように正確に完成すると」とし、“had seen it”を「それを見ていた」と単に付け加えている。ここは形式的には < all + V-ed > という同じ形が繰り返されているし、また意味的には V-ed にそれぞれ “done” と “finished” の同義語が繰り返されていることから、“all done” がコンマの後で “all finished” ともう一度言い直されていることに気づくことは難しいことではないだろう。ただほとんど同じことを繰り返すのではあまり意味がないが、“all finished” の後にはさらに “exactly as her mind had seen it” が続いており、そこがまさに「彼女の心が見たままに」というプラスされた意味情報を伝えていることに気づかせたい。担当した学生の日本語訳を見ると、as の後が節になっている点も取り損なっている。しかし、これもそもそも、“all done” と “all finished exactly as her mind had seen it” が同格関係にあり、後者は、前者により詳細な情報を付加した繰り返しになっている、という構造と意味の大枠が理解できれば、避けることができた間違いではないだろうか。

(5) She (=a white quail) 's like the essence of me,

an essence boiled down to utter purity. (p. 23)

ここは、「あの白いウズラは、わたしの精髓のようなものだわ。完全な純粋さにまで煮詰められたエキスのよ。」の意である。“an essence boiled down to utter purity は the essence (of me)” と同格関係にあり、“essence” とは何かをより一般化して説明するパラフレーズとなっている。しかし、担当学生はこの同格関係を把握できず、「彼女は私の本質のようだ。その本質は純粋さを表現するのに煮詰まっている。」と訳してしまっている。“an essence boiled down to utter purity” を一つの名詞句としてではなく、“essence” を主語とする “boil” の自動詞文と捉え、“to utter purity” の “to” を状態などの変化の結果を導く前置詞 “to” ではなく、to 不定詞の “to” ととり “utter” を動詞と勘違いしてしまっている。コンマの前半部と後半部があたかも等位接続詞 and で繋がっている二つの節のように解釈し、おそらくそのためであろう、“an essence” の不定冠詞の an は無視され、前半部分と繋がるように「その本質」と定冠詞つきのように日本語にしている。

ここでの問題は、まずコンマを勝手に接続詞 and に置き換えて意味をとろうとしていることで、これにより “an essence” 以下の誤読が生じてしまっている。コンマを接続詞 ‘and’ と同等のものとして解釈する傾向は、前述の分詞構文、および次に触れる省略構文でも共通して見られるもので、指導上の一つの留意点になるであろう。“an essence boiled down to utter purity” が節ではないとすると、自動詞の過去形として捉えていた “boiled” が他動詞の過去分詞で “boiled down to utter purity” という形容詞句のまとまりを成し、それが名詞句 “an essence” を修飾して、全体としては「完全なる純粋さにまで煮詰められたエキス」という意味の名詞句になっていることが理解される。このようにコンマの解釈の修正から始まって “an essence” 以下の意味と構造が正しく理解できると、コンマの前後で “the essence” と “an essence” で同じ語が繰り返されていることに気づき、同格関係になっていることに気づくであろう。

3) 関係代名詞の省略

- (6) She wore a bright print dress, quite long in the skirt, and sleeveless. (p.17)

この英文に対する担当学生の日本語訳は、「彼女は明るく印刷されたドレスとかなり長めのスカートと、ノースリーブのシャツを着た。」となっている。“quite”の前に (which was) が省略されていることに気づかず、下線部が “a bright print dress” の後に続けて “a quite long skirt, and a sleeveless shirt” とあたかも名詞句が並置されているかの如く勝手に訳されている。(“print” を「プリント柄」ではなく「印刷された」と訳したり、“wore” を「着ていた」と状態の意味として取らず「着た」と動態的な意味で取っていることも問題ではあるが、ここでは下線部に絞って見ていく)。明るいプリント柄のワンピースとかなり長いスカートと、さらにノースリーブのシャツを着ている女性の姿が、一体どのようにこの学生の頭の中に描かれていたのだろうか。頭の中でその姿が思い描かれたその時点で、言語外の世界知識が働きその意味の取り方の珍妙さに気づき、自己の読解に修正をしなければならぬはずである。しかし、おそらく自分でもそのおかしさには気づきつつも、そこから修正に切り換えるところまでいかない。テキストへの関わり方があまりに淡白なのである。

ここは、文法的に ‘which was’ が省略されていることに最初から気がつかなくても、主に意味のストラテジーを用いて内容語の “long”, “skirt”, “sleeveless” だけに注目しても、一応「スカートは長くて、(スカートにはそもそも袖などないのだから) 何かの袖はない」というごくごく大雑把な意味はつかめるであろう。しかしここでさらに、“skirt” は旧情報であることを合図する定冠詞 “the” がついて (“the skirt”) ので、前述のワンピースとは全く別のスカートのことではなく、そのワンピースの「スカート部分」であることに気づけば、“quite long in the skirt” となっていることにも納得がいく。そして大雑把につかんだ「スカートが長くて何かの袖はない」は「そのスカート部分は長くて袖がない」に修正され、下線部は全

体として “a bright print dress” を付加的に後ろから修飾している部分であることが理解されよう。このように意味がつかめれば、そこから構造的には “which was” が省略されていると考えることができることにも気づくはずである。

4) 修辞疑問文

- (7) “Who could tell that such a pretty girl could have so much efficiency,” he said. (p.16)

ここでの学生の日本語訳では、「誰が〜と伝えることができるのか。」となっており、‘can tell=know’ の意味がわかっていないという問題もあるが、根本的に修辞疑問文 (rhetorical question) がきちんとそれとして認識されておらず、単純に普通の疑問文として解釈されてしまっている。次の事例においても同様に、担当した学生は「どのようにして彼は知ったの？」と日本語にしており、下線部が修辞疑問であることが認識されてはいない。

- (8) Mary couldn't blame him, how could he have known? (p.22)

反語的に使われる修辞疑問か普通の疑問文かの判断は文脈によって決まるが、おそらく担当した学生は、下線部が前述の “Mary couldn't blame him” と意味的にどのようにつながっていくのかを把握できず、修辞疑問を認識できなかったと思われる。つまり、下線部は “Mary couldn't blame him” の理由を表し、「Mary は彼を責めることはできなかった、(なぜなら) 彼にどうやってわかることができたであろう、できるはずはなかったのだから。」と解釈される。ただコンマで区切られただけで、その前と後の二つの節の間の論理関係は明示的には示されていないが、推論を働かせて気づかねばならないところであり、「読む」という行為が単に書かれた文字の字面を読み解くことではないことを示す一例と言えよう。書かれていることからさらに推論を働かせることによって、文脈に適合する意味を汲み取っていく力をつけていか

ねばならない。

5) 形式主語の it

学生の日本語訳において、形式主語の it を単純に「それは」と訳してしまうケースが目につく。

(9) Well, it would do him no harm to see what business really was like. (p. 21)

(10) It made her unhappy to be disturbed. (p.22)

上の二つの引用英文における it は破線部の不定詞を指示する形式主語である。しかし、担当した学生は当該の文に先行する何かを受ける it と捉えてしまい、前者は「それは～差し支えなかっただろう」、後者は「それは彼女を悲しい気持ちから不安にさせた」と訳している。“it” = 「それ」と機械的に反応するだけで、「それ」とは一体何を指示するのか確認することなしに字面をただ追っている様子が伺える。仮に、形式主語の it を「それは」で解釈しても、破線部を意味的にうまくつなぐことに行き詰るので、本来はそこで自己修正がかかり英語の文構造に関する知識が活性化され、文構造全体の捉え直しが行われるはずである。しかし、後者の英文に対する学生の日本語からわかるように、自分の意味の取り方の問題に気づき文構造の捉え直しへと進むのではなく、力技で強引に自分流解釈を施してしまっている。

次の英文の下線部の “it” は、実際は “when” 以下の内容を指しているので形式主語の “it” と捉えることができるが、状況の “it” とみなすことも可能である。

(11) It seemed to make him ashamed when he turned the knob and found the door locked.
(p. 21)

指導上は、そのいずれの用法かというよりも、“it” が実際に “when” 以下の内容を指示していることを学生には理解させたいところである。が、ここでも学生の日本語訳は、「それは、彼がドアノブを回し、ドアに鍵がかかっていたのに気づいた時、彼に恥をかかせたようだった。」となっており、“it” が先行す

る文脈中の何かを指示しているかのように「それ」と訳され、“when” 以下の内容を受けていることに気づいている形跡は見られない。

一般に代名詞が何を指し示しているかについてきちんと理解することは、一文レベルの理解にとどまらず、文章理解にも不可欠である。代名詞の指示するものを常に確認しながら読み進めることを徹底させる必要がある。

6) 使役動詞・知覚動詞

担当学生の和訳を見ると、使役動詞 [または知覚動詞] + 目的語 + 分詞 (句) という文型の場合、その形と意味は知っていても、実際の英文の中で十分に応用できていない場合が多いように感ぜられる。そのような例を次にあげる。

(12) “...We'll have to have the lawn raked every day to keep the oak leaves clear. (p.15)

(13) “... I like too much to see your own mind coming out in the garden.” (p.16)

文脈から見た場合に、両者とも第 5 文型にとるのが適当だと思われる例であったが、(12) では「掻きならされた芝地を持つ」、(13) では「庭に出ているあなたを見る」と訳されていた。(12) の場合の担当者の訳では “have” がまず使役動詞として認識されておらず、知識としてはある使役動詞 + 目的語 + 分詞 (句) のかたちだと判断できず、結果的に分詞の限定用法にとっており、(13) の場合は、やはり “see” の第 5 文型の用法がつかめず、同様に分詞の限定用法ととっている。このように目的格補語に分詞が来るような場合において、目的語と補語の間に内在する主述関係が意識されず、目的語の単なる修飾語句として捉えられているケースが目立った。まずは教える側が、学生が使役動詞・知覚動詞の基本的な意味と用法を知識としては押さえている場合でも、十分理解しているかどうか授業の中で確認するような手法を、授業の中に盛り込んでおく必要があろう。

3. 文章レベル

この項で以下にあげる例は、長さからいえば文章というよりは文単位に近いが、誤読の該当箇所だけの検討で説明がつくというより、前後の文脈理解が決め手になるものが多いので、「文章レベル」と項目立てたものである。

1) 指示語の指示対象

指示語はことばとしては短く、些少な印象を与えるためであろうか、軽視され易いようである。

- (1) "You make me kind of — hungry." That startled her a little. A little expression of annoyance crossed her face. (p.15)

これは女主人公 Mary (例文中の "her") の夫 Harry が、求婚したときの場面で言ったことばである。Mary がプロポーズを受け入れ、とりとめなく庭の話しをしている間、Harry は彼女の愛らしさに見惚れながら唐突に言ってしまったことばが "You make me kind of — hungry." である。もちろん "That" はその発話内容を指すのであるが、担当学生は「あのこと」と訳した。つまり、何かもう少し隔たりのあるものを想定して訳しているわけで、「this は近いもの、that は遠いものを指す」という素朴な概念のみに頼った結果であろう。先行箇所を受けるのには、かつては that がよいとされていたが、今は this の用法もある (大塚・小西 'this, that' の頁)。これだけでは学生も迷うところであるが、上の例の後半部分 "A little expression of annoyance crossed her face." の箇所について、なぜ彼女は嫌な顔をしたのか考えることが大きな決め手となろう。「君を見ていると我慢できなくなりそうだ」という sexual allusion を含む "hungry" を理解するのは、人によってはなかなか難しいことではあるかもしれない。しかし、ここでは文脈理解と、語法、人生経験などが正しい読解へのポイントとなっている。学生に喚起すべきは、特に読解においては、とにかく代名詞が何を指しているのか、意識的でないといけないということであろう。

2) 時制・時制の一致

日本語と英語において時間のニュアンスの表現のしかたに違いがあり、結果的に英語の「時制」に対する感覚が曖昧になり、そのことと相俟って不理解が生じているケースが多くあるように思われる。

日本語と英語における時間のニュアンスの表現方法の違いを考えてみると、特に英語の過去形、現在完了形、過去完了形、助動詞の過去＋完了形の訳出のときに、日本語の助動詞「た」が関係することが多く、結果的に「何でも「た」を使うような向きがあり、英語の時制・相のニュアンスがうまく言い表せていない場合があるようである。日本語の助動詞「た」の意味を『広辞苑』から例を挙げると、

- a. 昨日、山に登った。(過去)
- b. 昨日は雪が降ったので開会式は延期。(過去)
- c. 今着いた。(動作の完了)
- d. 仕事が済んだらでかけよう。(動作の完了)
- e. ちょっと待った。(動作の実現を促す)
- f. 壁にかけた絵。((後ろに体言を伴い) すでにあった結果が今もあることを示す (存続・存在))

「過去」、「完了」、「命令」、「存続」、「存在」、場合によって「未来」の事態をもすでにこの一語の中に含むので、「～た」の包摂する意味範囲はきわめて広い。特に「過去」の意味と「完了」の意味を両方含むので、英語の過去形、現在完了形、過去完了形などの訳にも適用できる場合がある。それを恣意的に応用して、助動詞の過去＋完了形も、あるいは単なる現在形も「た」で訳するようなケースを、筆者は授業などで何度となく経験している。つまり、厳密に時制と相のニュアンスを区別しようとする英語のどの形態にどこまで「た」が適用できるのか認識整理されておらず、混乱をきたしていることが考えられる。この問題はわれわれが思っている以上に学生にとって難物なのだ、という印象を与える。

- (2) The little fuchsia trees had been moved in so carefully that not a leaf wilted. (p.16)

この例では、まず受動態が把握されていなかったが、ここでは時制の問題に限ると、担当学生は「小さなフクシアの木は葉がしおれない様にとっても慎重に運んだ。」と訳しており、「注意深く運び込んであったので一枚の葉もしおれていなかった。」という、過去形と過去完了形で表されている時制のズレが意識されていないことがわかる。「結果」や「様態」を表す“so ~ that”と目的を表す“so that”の用法を混同していることも影響しているが、もし時制に対する鋭敏な意識—語形に表された時制のズレの認識—があれば、この混同にもチェックがなかったかもしれない。

- (3) Somewhere she had found an old-fashioned sunbonnet. She wore good sturdy gloves to protect her hands. (p.17)

担当学生の訳は「彼女はどこかで古風な日よけ防止を見つけてきた....」であるが、ここでの過去完了形は「そのときに見つけに行きつけてきた」のではなく、すでに「見つけてきてあった」ということであって、文脈からも「帽子を見つけてきていて、そのときそれをかぶっている」ということまで含意するということが、どの程度理解されているかが問題である。学習者の「見つけてきた」はすでに完了的なニュアンスはあるが、時制のズレまでには意識が及んでいないのである。日本語における過去や完了、存続の意味の違いが、語形の上からはかなり曖昧であることが、厳密に語形の違いで時制・相の違いを表現する英語での完了形のニュアンスの理解を難しくしているようである。

英語の小説を読む場合には、この厳密な区別ができるかどうか、内容の把握・理解、ひいては作品の鑑賞に大きく影響する。これはあとで扱う自由間接語法を理解することにも通ずることである。

- (4) She stretched her pretty arms and fingers on the chair, as she had seen them through the window. (p.20)

この例文の引用箇所のすぐ前に、主人公メアリーが家の外から夫のいる家の中を窺い、直前まですわっていた椅子に自分が座っていたらと想像する場面があるのだが、この例文の“had seen”はその想像ないしは妄想の行為を指している。担当学生の和訳では「彼女は... それらを見ながら... かわいい腕と指を伸ばした。」とあり、文脈と語形の違いによる時制のニュアンスの違いに思いがおよぶならば、“as”を「見ながら」という同時性を強調する意味に取り違えることは無く、「(たった今) 見たように」と訳すことができたのではないだろうか。

- (5) Mary waited until it was all done, all finished exactly as her mind had seen it ... (p.16)

担当学生はこの例を、「メアリーはそれが全て終わるまで待ち、全てが彼女の思っていたように正確に完成するとそれを見ていた。」と訳したが、「頭から、チャンクを意識して、英文の流れにそって読む」という、多く高校まででも教わる「英文読解」の基本的なコツを忠実に守っている、とも言えなくはない。すなわち“done”で切り、“finished”を自動詞と考えてそこで切り、“as her mind”を一つのチャンクとみなし、“had seen it”の主語を最初の“Mary”と取っているわけである。これは例えば punctuation を無視する強引な訳ともいえるが、チャンクの仕方は、部分部分のチャンクのまとめ方だけ考えると成立するかたちであり、推測するにおそらく担当者の中では習ったことに忠実に筋を通したという気持ちがあると思われる。問題は結果をどう検討・検証するかであるが、多くの担当者に見られるように、いったん何か理由でも屁理屈でも立てば追求しないという「淡泊さ」が、ここでも感じられる。動詞の部分の訳語は過去形と過去完了の区別ない並列的な日本語であり、時制の違いはまったく意識されていない。意識されていれば、「最初は“waited”で次は“finished”、では最後はなぜ“had seen”なのか、そもそも自分の文構造のとり方は正しいのか、“finished”は本当に過去形なのか...」という検討が始まったかもしれない。

次の例は、夕方になって庭に忘れた鋏を取りに行っ

た主人公が、窓から家の中の様子を見たあと家の中に戻って夫と口論めいた会話を交わし、夫が主人公の発言について悩む様子を描いた箇所である。

- (6) Harry looked seriously into the fire for a long time. Mary could see him, and she knew he was worrying about what she said. (pp.20-21)

先に述べたように、時制、相の微妙なニュアンスが語の形態からわかるシステムを英語は持っているが、逆にこのことは形態と意味を単純に固定化して理解してしまうということにも通ずる。この例では時制の一致によって“knew”と“was worrying”は時間的に同じ位置になり、時制のズレを過去完了形で表わすまでもなく単純な過去形になっており、直訳的に言えば「メアリーはさっき自分が言ったことを、夫が心配しているのがわかった」となるはずである。しかし、担当者は上の例において、“knew”には「わかった」、「was worrying」には「心配していた」、「said」には「言った」、と個別に機械的に日本語をあてがって「彼女が言ったことについて彼が心配していたことがわかった。」としてしまっている。その結果、この訳では“was worrying”が過去からの継続的な精神的活動のニュアンス与えられ過去完了進行形的なニュアンスで捉えていて、夫がメアリーの目の前で考え込んでいる様子は伝わってこない。いわゆる学校文法の学習項目に「時制の一致」があるのは、このような機械的な認識を避けて英語の時制の表し方の特徴を習得させるということが一つにはあると思われるが、主節の動詞が過去形のときの従属節の動詞との時間的相関関係は、時制を一致させることで保たれることを理解させ、それらの動詞の間に時制のズレがあるかどうかを確認させ、どの時制で表現することが適当かを常に意識させることが肝要である。

3) 仮定法

次の例は仮定法に関する例である。仮定法は、仮定条件節で表明された被伝達内容を、非現実または実現性の薄いものと暗黙に前提した上で、動詞の過

去移行によって仮定法であることを指示する表現形態であると言える。したがってそのような前提があるということが了解されていなければ、また同時に、過去移行で示されているみかけの時制が、実際の時制を指示するのか、その過去移行のパターンが把握されていなければ、どのような仮定・想定がなされたかを正しく理解することはできない。

- (7) If you didn't go around to the front of the house you couldn't tell it was on the very edge of the town. (p.14)
(8) “Are you ashamed of my business? I wouldn't like it if you were.” (p.21)
(9) Mary couldn't blame him, how could he have known? (p.22)

(7)、(8) の例においてそれぞれの担当者は、その家の周辺に行かなかつたら「分からなかつただろう」、もし恥じているなら「それを好きじゃなかつただろうに」と和訳しており、「分からないだろうに」「いやだな」とは訳せなかつた。「だろうに」と訳していることから仮定条件節が明記された仮定法であると判断してはいるが、過去移行のパターンを誤り、英語の過去形に引きずられて、仮定法過去完了の気持ちでとってしまった例である。(9) の学生訳では、「...どのようにして彼は知ったの?」となっており、助動詞過去 + have + 過去分詞という形態の意味合いが認識されていなかった。“how can ...?” という修辭疑問の慣用表現にも思いいたらず、「知りようがないではないか」という訳にはならなかつたようである。以上のような、仮定法における過去移行パターンで表わされる意味合いと直説法における過去形・過去完了形の意味合いとが混同されている例は、平素の授業においても気にかかるところである。ここでは、仮定法の過去移行の形態パターンを正しく認識することだけでなく、語法を知ることの重要性も指摘される。つまり、will の過去形 would は過去の習慣、意志、能力などの意味合いを持つとき以外は、時制の一致か仮定法の帰結節で用いられるし、could も仮定法で使われることが多い(大塚・小西)という慣

用法に通じておけば、時制表現の形態が表わすニュアンスを正しく認識する確率も高まることになる。

ほかの誤訳パターンとして、if 節がなければ仮定法と判断していない次のような例も見られた。

- (10) He might have trouble with complicated things, ..., but he understood about the dog. (p.22)

この例文において、担当者は「彼は複雑なことで悩んだ...。しかし彼は犬について理解した。」と和訳している。この引用の前後の部分をここでは詳しく示してはいないが、ここでは「複雑なことに関してであれば」という隠れた if の気持ちがある。が、助動詞 might にある仮定法過去のニュアンスに思いがおよばぬためか、「悩んでしまうかな」と訳出するところまで至らなかった。‘may’ と ‘might’ は時の相違よりはむしろ可能性 (possibility) の程度の相違を表わすが (大塚・小西 ‘might’ の項)、仮定法的、婉曲的な推量の用法まで調べたかが問題である。日頃から辞書をひくときに語法まで調べるくせをつけさせたいものである。また、上記の仮定法の誤訳例からは、形態とその意味合いを知ること、語法に明らかなことが、誤訳を防ぐために先ず押さえておくべき事項であることがわかるが、それらの知識によって語に対する勘を強化することの重要性のほかに、そのような勘が正しいかどうかを判断する手立て、後ろ盾としての文脈理解の大切さも学生に再認識させたいところである。

4) 自由間接話法

自由間接話法についてグリーンバウム、クワークは、「発話ないし (特に小説において) 思考の流れを伝えるために広く用いられる」(14 章 22 節) と述べている。

基本的に間接話法の形をとり、伝達節が省略され、直接話法で可能な文構造は残される。その被伝達の箇所が、直接話法ではなく間接話法的に「報告」されているということは、代名詞、限定詞、時、場所、それに動詞の過去移行によって表される。(グリーンバウム、クワーク 14 章 22 節) 厳密な間接話法に

よる客観描写ではないこと、さらに仮定法となった場合では時制の一致も受けないことなどから、担当者の特に混乱するところであろう。次の例文は、置き忘れた鋏を探しに庭に出た主人公が、窓から家の中の様子を窺い見ながら、自分が家から外に出なかったら何をしているだろうかと夢想する場面である。

- (11) ... then she looked in the window, into the living room. ... There was the big, deep chair she had been sitting in a minute ago. What would she be doing if she hadn't come outside? (p.19)

担当学生が「もし彼女が外へ出なかったらなにをするだろうか。」と訳したこの例において、まず、女主人公は実際は家の外へ出ているから、“if she hadn't come outside” という条件節は現実と反する仮定であることがわかる。したがって下線部は仮定法だろうかと目星がつくこと、仮定条件節が過去完了形、主節が過去形であるから時間の「ズレ」があることまではすぐ確認できる。この点が確認できさえすれば仮定の部分が仮定法過去完了であって、「出ていなかったら」と修正するのは比較的容易であろう。問題は担当者訳の「彼女が... なにをするだろうか」という、三人称的な和訳部分である。“she” を用いているから、事態の客観的描写であると解釈しているのは、ある意味で正しい。しかし、“What would she be doing” という疑問文は直接話法的であるから、ここがこの一文が間接話法的でもあり直接話法的でもあると気がつくポイントであった。おそらく担当者も二つの話法の要素の違和感を感じていたからであろう、和訳の最後は疑問文的に「するだろうか」と結んで処理している。学生にはこの違和感を利用して説明するとよいであろう。つまり、語り手による客観描写的な発話であることに違和感を覚えるのであれば誰の発話なのか、ということである。この発話は「外に出ていなかったら、あたしは何をしているだろう」という女主人公の心のつぶやきであり、彼女のリアルタイムな心理に触れるかのような感覚がある。この発話においては、時制や相、仮定法や話

法の理解、登場人物の心理的状況の把握（つまりは文脈）などが絡むので、学生にとってかなり難しい作業となっているといえるだろう。

テキストに用いた「白ウズラ」では、自らの分身である「庭」に対する女性主人公の執着が、ほとんど偏執的な妄想に近いものとなっているかのような印象を読者に与える描写が随所に出てくる。主人公の病的な心理状態が、随所に盛り込まれ描かれているのだが、客観的で静的な語りの部分から折々に主人公の内的世界に足を踏み入れ、主人公とともに偏執の世界を共有するような効果が自由間接語法によって生み出されている。したがって、このような箇所を読み誤ることは、鑑賞という観点からは致命的ともいえるかもしれない。しかし、このような誤読は英語学習者にとってステップアップの良い契機である。

上述のような難しい作業をとまなう文学作品の読解を大学の英語学習に取り入れることは、ここ十数年特に敬遠される、というより排除される傾向にあるが、英語における伝達という観点、送り手から受け手への伝達における適切な言語使用とその支配規則を知るといふ談話分析的観点からは、コミュニケーション・ツールとしての真の英語らしさを知ることができる秀逸な教材となる。読解上難しい作業過程もあるので、教材を厳選した上で学習時期を学習者にあわせて考慮すべきであるが、コミュニケーション力の習得、頭打ちになりかかった英語力の向上などに十分威力を発揮する教材と成り得る。導き方が適切であれば、このような文学テキストの読解作業には得るところが多いと思われるのである。

IV. まとめ

今回の分析結果から明らかになった指導上の留意事項を以下にまとめる。

- ① 語のレベルでは、語義の多様性や語形に注意し、単なる語の置き換えにならない、文脈にそった語義の選択をさせる。特に、前置詞や副詞の文中での働きや意味につねに注意を向けさせることで、句動詞などの正しい理解を導く。
- ② 文のレベルでは、複雑な文になると文構造の

把握が困難になる。チャンクの文中での働きを確認しながら正しいチャンキングに導き、文構造を理解させその理解に基づいた解釈をする習慣を身につけさせる。

- ③ 文章レベルでは、時制や法などの文法諸事項から文脈を理解するだけでなく、文脈の中でそれらの諸事項を理解する双方向的な読みをさせる。

語、文、文章のどのレベルにおいても欠かせないことは、自分の解釈を常にモニターし、必要に応じて修正を加えながら読むことである。「読む」という活動は、一つ一つの語（句）、一つ一つの文を解釈するだけでなく、読み手の持つ言語知識と言語外の知識（世界知識）と読み手の推論を総動員してそれぞれの部分に有機的なつながりを補い、破綻のない全体をまとめあげていくことである。しかし、個々の部分の読み取りが間違っていては、それをつなぎ合わせる言語外知識は正しく活用されず、その読み取りに基づく推論は成立しない。

多読や速読をとおして読む量を多くし、「読み」に慣れさせることは大切である。しかし、もう一方で、精読用教材を用いて緻密な「読み」ができるようになることも読解力の向上には欠かせない。学生にとっての負荷が多少大きくても、精読に値する教材も適宜用い、学生に真の読解力を身につけさせていきたい。

注

John Steinbeck, "The White Quail," *The Long Valley* (1938; Penguin Books, 1995) 本文で挙げた例文は同書からの引用であり、それぞれの例文の終わりに同書によるページ数を（ ）に入れて示した。また、例文中に施した下線は、執筆者によるものである。

参考文献

『旺文社レクシス英和辞典』(2003) 旺文社.

『広辞苑』第 4 版第 6 刷 (1997) 岩波書店.

『ジーニアス英和辞典』第 5 版 (1992) 大修館書店.

『リーダーズ英和辞典』第 2 版第 17 刷 (1993) 研究社.

江川泰一郎 (1998) 『英文法解説 改訂三版』 金子書房.

Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1975) *A Communicative Grammar of English* Longman Group Limited (邦訳: ジェフリー・リーチ、ヤン・スヴァルトヴィック (1993) 『現代英語文法コミュニケーション編』 第 6 刷 池上嘉彦, 池上恵子訳 紀伊国屋書店.

大塚高信、小西友七 (1973) 『英語慣用法辞典改訂版』三省堂.

Sidney Greenbaum and Randolph Quirk (1990) *A*

Student's Grammar of English Language Longman

Group UK Limited (邦訳: シドニー・グリーンバ

ウム、ランドルフ・クワーク (1995) 『現代英語

文法大学編』 池上嘉彦他訳, 紀伊国屋書店.)

天満美智子 (1989) 『英文読解のストラテジー』 大修館書店.

津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ編 (2002) 『英文読解のプロセスと指導』大修館書店.

松浦雄二、マユアキ、小玉容子 (2005) 「英語基礎学力テストにおける誤答分析」『島根女子短期大学紀要』 第 43 号, 11-20

宮浦国江 (2002) 「第 2 章 語彙」 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ編 『英文読解のプロセスと指導』 大修館書店.

(平成 17 年 10 月 31 日受理)